

---

# ぼく,わたしの夢

あーゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼく、わたしの夢

### 【Nコード】

N9877X

### 【作者名】

あーゆ

### 【あらすじ】

小学生の頃の作文。

何を書いたか思い出せない2人は作文を大搜索。

2人が書いた幼き頃の夢とは…？

穏やかな日曜日。

おっちゃん朝から競馬に出掛けたので  
珍しく俺がここにいる。

「あれ？ないなあ」

蘭は俺を部屋に招き入れたあと押し入れの大搜索。

部屋に招待されたものの俺は手持ち無沙汰でその姿を見つめる。

「あ、ごめん。今コーヒーいれるね!!」

「いや、おかまいなく。なに？朝っぱらからずっと探しもんか？」

きちんと整頓された小物たちとは逆に押し入れの周りはいろんなものが散らかっていた。

「ねえ、新一って昔からホームズになりたかった？」

「へ？なんだよ急に」

キッチンからあたたかいコーヒーとカフェオレを運びながら蘭が問いかけてきた。

「あのね、昨日元太くんたちに来てね」

「ああ。元気か？あいつら」

「元気だったよ。博士の家でみんなで宿題って言ってたから。だから一昨日焼いたクッキーを差し入れたの。でね…」

嬉しそうな顔をしてカフェオレを一口。  
蘭が思い出しわらいしながら続ける。

「宿題は作文だったんだけど。」ぼく、わたしの夢”っていかにも小学生の宿題だったのね。」

「へー」

「それでみんなの”夢”を聞いたんだけど。みんな”らしい”のよね。」

「なんて書いてたんだ？」

「内緒よ、内緒。人の夢なんて軽々しく他人同士が話していいもんじゃないわ」

ま。あいつらは大体想像つくけどな。

「で？それと、この大搜索はなんの繋がりがあんだよ」

「探偵なら推理しなさいよね」

「昨日頭使ったから今日はオフなんだよ」

昨日は進級のための課題テストだった。  
2年の出席率が悪かったので本来ならば留年のところ  
先生たちが”ありがたい特別テスト”を設けてくれたので土曜日な  
のにわざわざ学校に行き受けてきた。

今日はそのご褒美に蘭が昼食をご馳走してくれることになり招待を  
うけた。

「歩美ちゃんが『蘭おねえさんも昔書いた？』って聞いてきたから  
思い出したんだけど、あたしたちも書いたよね。作文。」

「まあ、このテのは定番だからな」

「でも何を書いたかさっぱりで…夢はたくさんあったはずだけど…」

「それでその作文探してんのか。お前のことだから”お母さん”と  
か”お嫁さん”じゃなく？」

俺は言ったあとハツとした。

蘭は振り替えることなく

「ん…それはないと思うな  
なんて答えたが。」

「ほら。もうすぐ進級でしょ？進路のこともし少し悩んでるし、参考  
になるかと思って。新一は何を書いたか覚えてる？」

少しぬるくなったコーヒを飲みながら記憶を辿る。

「いや…書いたことすら忘れてたしな。」

そんな他愛もない会話をしながら蘭とその作文を探した。  
結局見つかることはなく遅いランチをご馳走になり、おっちゃんが  
帰宅する前に帰路についた。

「あの作文…なに書いたっけなあ…」

ずっと思い出そうとしているがだめだ。

しかも蘭も知らないということはお互いに見せあうことはしなかつ  
たらしい。

珍しいな…宿題や作文、そついった類いはよく見せあっていたのに。

「あ。新一おにいさん…！」

「おっ。」

探偵団が博士の家から出てきた。

「宿題か？」

手に持っているカバンを見ながら問いかけた。

「はい。2日かけて大作が出来上がりました!!」

「自分の大人になったころを考えるの楽しかったよな」

「…おめーら将来の夢ってなんだ？」

「僕は学者です！！」

…光彦らしいな。

「俺は鰻重屋やりてえけど。たぶん父ちゃんの跡継ぎだな」  
お。意外な答え。

「歩美ちゃんは何？」

「もちろんお嫁さん！！！」  
らしい答えだな。

「新一おにいさんは？」

「んー…立派な探偵になること。もうひとつは…大切なひとを守れるような強い人になる。」

「”らしい”答えね」

背後から声がした。

「あ。宮野…」

「ほら。あなたたち暗くなるから帰りなさい。」

子どもたちを見送り宮野と少しばかり話し込む。

「蘭、元気だった？」

「あ？いつも通りだったよ」

宮野は少しホッとしたらしく口元をゆるめた。

「昨日、あの子どもたちの作文読んで一瞬だけど悲しそうになったから……」

ピンときた。

「ああ。歩美ちゃんの作文でだろ。本当はあいつ、作文に同じこと書きたかったけどおばさんが出ていった直後で書けなくて。そんなこと思い出したんだよ。」

「なるほど……。幼少の記憶って結構当時の気持ちも一緒にしまわれてるものね。」

「ところであなたは当時なにを書いたの？」

「……………まったく記憶にないんだよな。」

宮野と別れて

俺も押し入れの大搜索をはじめた。

母さんのことだから綺麗にファイリングされてると思っただけど……

「お。あつた！……！」

さすが母さん。

丁寧にしまわれていた。

『ぼくの夢』

くどくどしんいち

ぼくは大人になったらホームズのような人になりたいです。  
しんじつをつきとめ、困っている人をたすけてあげたいです。  
もうひとつは

お父さんのようより強い人になりたいです。

れいせいであたまのいいお父さんよりすごい人になりたいです。』

……あまり成長を感じない。

でもやはり昔から探偵になりかっただよな。

ヒラリ

一枚の紙が落ちた。

ぐしゃぐしゃに丸めたものを丁寧に伸ばしたようだ。

「なんだこれ

げっ！！！！」

一気に記憶が蘇る。

時差なんて考えてる余裕もなく受話器を手に取り国際電話。  
もちろんコレクトコール。

「かあさん！！！！悪趣味なことしやがって！！！！」

『はあ？いきなり電話かけてきてなに言ってるの？』

「小学1年のころの作文!!  
失敗して捨てたはずのもんがファイリングされてたんだよ!!」

『え?作文?』

「ぼく、わたしの夢”ってやつ!!」

『……………ああ!!だってとても良い出来だったから。わたしが先生だったら花丸あげるわよ。あんな熱烈な文章!!なんで提出しなかったの?』

「できるかつ!!」

ぴんぽーん

言い合いをしていると来客だった。  
時間はもう21時。

この時間に来る人物は…

「わりい。きるぞ」

『あ…ちよっ…新一っ』

問答無用で受話器をおき  
ポーカーフェイスをつくりなおす。

「こんな時間によくおっちゃんが許したな」

「まだ帰ってこないからどこかで飲んでるかも。」

蘭はにこにこしながら玄関へあがる。

「みつかったの。作文」

「おれも…」

「新一も探したの？」

心底意外…という顔をされた。

「やっぱりホームズって書いてた」

蘭はやっぱりね〜なんて笑顔をみせた。

「蘭はなに書いてた？」

上目遣いで作文を俺に渡す姿に愛しさを感じながら  
蘭の作文に目を通す。

『わたしのゆめ  
もうりらん

わたしのはおまわりさんになることです。

悲しい思いをしている人をたすけてあげたいです。

正しいことを正しい ちがうことをちがうと言えるゆづきをもちたいです。

』

「意外…そして立派な文章ですこと」

「お父さんが刑事やめたあとに書いたのよね。あたしも意外だけどちよつと納得。」

「ん？」

「新一と一緒に真実を突き止めたかったのよね。」

蘭はにつこりと笑った。

「あのとき

お母さんが出ていった直後だったでしょ？」

お嫁さんになることが夢だったけど…いつか離れるときがくるのか  
なつて思うと悲しくて。結婚なんてしたくないって本気で思った。」

「ああ…」

「すごく寂しくてお父さんもお母さんもあたしが嫌いなのかつて悩  
んでたけど新一はずつとあたしの側にいてくれたでしょ？」

だから”新一とずつと一緒にいられる方法”を考えたの。」

「おめー…その結果が警察か」

「でも正しいよね。あたしと一緒にいるときでも警察からのラブコ  
ール受けちゃうし。あたしより警察の方が共有時間長いんじゃない  
？」

「んなこたねーだろ」

「でも…あたし昔から無意識に新一といることを願ってたんだね。そういう意味では夢叶ったかも」

嬉しそうに蘭は笑う。

無意識だよな…この殺し文句。  
自分でも赤面するのがわかる。

「新一ももう立派な探偵だもんね。夢叶えてるじゃない」

「まだまだだよ。紅茶飲むか？」

「うん」

蘭の気持ちがあたたかった。

当時、俺がそばにいたことで蘭の寂しさが紛れて  
その後も一緒にいたいと思ってもらえたことが誇りだった。  
この先もどうか

俺が蘭を守っていけるように強い大人になろう。

「蘭、紅茶」

キッチンから出たとき蘭の手にあるものを見て動揺した。

そう。”提出しなかった方のぐしゃぐしゃの作文”を持っていた。  
母さんに電話するのに夢中で出しっぱなしだったのだ。



完全に酔っている小五郎の罵声が響く。  
少し受話器を離しながら

「あー… やつとお帰りですか。夜に1人は危険なのでお嬢さんはいまうちに。責任持って送りますから」

『おめー!! 蘭になんもしてねえだろうなっ』

…キスしようとしたら邪魔が入ったんだよ!!

「…………… なにもしてませんよ」

『今の”間”はなんだ!! くら…』

ガチャッ

会話を遮り受話器を置いた。

「蘭。送るから帰るぞ」

「あ。うん!!」

蘭は先ほど俺が丸めた作文を綺麗にのばしていた。

「これ 貰っちゃだめかな？」

上目遣いのおねだり。

俺はこれに弱い。

「…自由」

嬉しそうに蘭は作文を見つめる。

『ぼくのゆめ  
くどうしんいち

もし、好きな人をかなしませるようなことばかりするならば、ぼくは大人になりたいとありません。

ずっと子どもでその人といっしょにいたいからです。

でも子どもだとできないことがたくさんあります。

だからぼくは強くて優しい大人になりたいです。

らんがもう泣かないようにぼくがらんを泣かせるぜんぶから守ります。

何があってもそばにいます。

おじさんやおばさんがそばにいれないならば、ぼくが。

らんを守るために、だったら

早く大きくなりたいです。』

「ふふふ」

「なに笑ってんだよ」

「だって…愛されてるなって」

「バーロオ」

「これも実現してるね。側にいてくれるもん。」

「…俺もおめーを泣かせてるけどな」

「じゃあもつと”大人”になってもらわないと」

静かに手をつないだ俺たちは微笑みあう。

「…作文に書くって俺も大胆だよな」

ぼそりと呟く。

「え？」

「なんでもない。」

おめー、今現在の夢はなんなんだ？」

「え…ああ。学校の先生になろうかかって。」

「おめー向いてるかもな。」

でも警察はやめたんだ？俺と真実を追うのは終わりか？」

ちよつとからかってみる。

「…だって。警察官にならなくても一緒にいる方法あるでしょ？」

「へ？」

「もう一つの夢は…まだ内緒」

かすかに頬をそめた蘭。

どうかその夢が俺と一緒にあってほしい。

俺の現在の夢

ホームズのような探偵になること。  
蘭と一生、一緒にいること。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9877x/>

---

ぼく,わたしの夢

2011年10月28日09時14分発行